

近世末期の海辺の利用

—名所図会から—

橋 村 修

- I. はじめに
- II. 名所図会にみる海辺の利用
- III. 海辺の描写の特徴
- IV. まとめ

I. はじめに

海と人との関わりは多様である。「海業」「漁業」関係者¹⁾と海を生業としない立場の人で、海との関わり方には違いがある。海には経済的な利用のほかにも信仰、余暇、祭り(浜降り、海の神輿)、遊びとしての釣りををはじめとして様々な利用がある。日常的に海に出ている漁師でも「板子一枚下は地獄」と言われるように、常に恐怖と隣り合わせで、出漁前に祈りを神仏にささげる習慣は今でも存在するように、海を「他界」とみる習慣はひろくみられる。

海辺利用に関する歴史地理学的な研究は漁業や海運などの経済性の高い諸事象を主な対象としておこなわれてきた。そのため、「遊び」や趣味の漁業、祭事と海などの視点での研究の余地は残されているといえよう²⁾。この分野の研究は、経済的な面が薄いこともあるため漁業史、漁業経済史、地理学からも研究対象になってこなかったが、人と自然との関わりを知るうえで重要なテーマである。『平凡社世界大百科事典 第2版』には「遊漁」がある³⁾。「遊漁とは、水面で魚や水産動物、

貝など水界生物を採捕するレジャーである。遊漁の水面は、海面と河川・湖沼などの内水面に分かれる。遊漁の方法には、船釣り、磯釣り、突堤などでの陸(おか)釣りのほか、潮干狩り、地引網、簀(す)立てなど各種の観光漁業がある。」とあり、海面遊漁人口が近年増加するなかで80%近くが釣り、潮干狩りが10数%を占めるとし、遊漁船である釣船や渡し船(瀬渡し)には漁業者の漁船(漁業者の遊漁兼業)が多く、その所有漁船中約2割が遊漁客を乗せているという。「遊漁」に関しては漁業経済学や民俗学⁴⁾からの研究がある。

江戸期の「遊漁」については永田一脩⁵⁾、長辻象平⁶⁾、太田尚宏⁷⁾等の研究があり、浦安市郷土博物館によるシロギス釣り研究などがある⁸⁾。そのなかでも精力的に研究を進めている長辻は、遊興としての釣りについて藩主の趣味(江戸在)、江戸の武士の嗜みとしての釣道が江戸大坂など都市圏から各地へ展開し、都市部で武士層から庶民層にも拡大し、幕末期に釣り指南書が多く出版されたとする。こうした研究によると、近世の「遊漁」を記した書としては、『何羨録』(かせんろく)1723(享保8)年。陸奥国黒石藩主津軽采女著とされる釣書)があり、釣り場所(江戸周辺の根など。キス)、釣り道具、天候などが記されているという。

庄内藩(鶴岡)では1718(享保3)年ごろ藩主が温海地域で磯釣りをおこない藩士に普及

キーワード：近世末期、海辺利用、名所図会

したとされ、「釣道」を奨励したという⁹⁾。天保期の秋田・久保田藩士吉成市左衛門日記『万之覚』(角館)には川の鯀釣の日記、魚食記録も記されている¹⁰⁾。長辻によると、平戸藩士が平戸周辺の釣りを記した『魚釣帳』(1835(天保6)年~1842(天保13)年)や『釣魚雑記』(1847(弘化4)年)もあり、江戸においても釣りは庶民へも拡大したという¹¹⁾。

また近世の名所図会には釣り場・土産(海産物の特産品)や関連する名所、行事(旧暦3月3日浜下り、「祭事」での海神輿の空間利用など)の記載がある(『撰津名所図会』など)。潮干狩りは江戸期も現代も同じように続いているが、江戸期は神事として旧暦3月3日に入るところが多かった。

海水浴の原型といわれる潮浴びは江戸時代においては禊や療養の潮湯などがあったとされ、海水浴や海辺の療養に関しての歴史地理学の視点からの研究がある¹²⁾。

海浜利用を描いた浮世絵も多く、葛飾北斎の『富嶽三十六景』の「登戸浦」(文政期から天保期)、『江戸自慢三十六興』(三代豊国二代広重)の「洲さき汐干かり」は潮干狩りを描いている¹³⁾。このように、海は景勝地としても知られ、「信仰」から観光の場へと変質していく傾向もある¹⁴⁾。観光としての漁業については、現代における漁業見物観光として、定置網・地引網体験観光・ホテルイカ漁見学などがあり、特に広島県福山市鞆の浦の鯛縛り網、千葉県鴨川市小湊の鯛の浦の天然鯛を船上から観察する遊覧船が知られている¹⁵⁾。さらに海産物を扱う市場のほかには海の駅なども近年多く建設されている。松浦によると、漁村での漁業体験を実施したいと答えた学校で、実施したい漁業体験の内容として、地曳網、定置網、釣り、潮干狩り等の漁法をあげているという¹⁶⁾。

本稿では、各地の「名所」を記した名所図会から海辺の利用を取り上げていく。海と名所図会の研究は、建築史¹⁷⁾、歴史地理学¹⁸⁾

などからおこなわれてきた。名所図会の釣り関係の場面については岩瀬文庫が展示をおこない、『江戸名所図会』『撰津名所図会』『五畿内名所図会』(撰津部巻3)で検討しているように、江戸大坂を中心に紹介されてきた。また、漁業史研究では『日本山海名産図会』(1799(寛政11)年)をはじめとする産物誌が取り上げられることが多かったが、名所図会の漁業風景を対象にした研究は十分におこなわれているとはいえない。描かれた漁種が名所図会で取り上げられた理由、さらに、「漁業・海業」を生業としない人々の視点から、海辺、海の営みについて、名所図会に描かれた海辺の利用から検討することも課題になる。

取り上げる名所図会は、『江戸名所図会』(1836年 斎藤月岑)、『尾張名所図会』(1844年 尾張藩士ら)、『伊勢参宮名所図会』(1797年 秋里籬島か)、『撰津名所図会』(1798年 秋里籬島)、『紀伊国名所図会』(1811年 和歌山の書肆・帯屋伊兵衛ら)、『淡路国名所図会』(1851年 暁鐘成)、『讃岐国名勝図会』(1854年 暁鐘成)、『金毘羅参詣名所図会』(1847年 暁鐘成)、『西国三十三所名所図会』(1853年 暁鐘成)、『長崎名勝図会』(文化、文政年間1804年~1830年)、『日本山海名産図会』である。

「漁業者・海業者」のみならず一般人(武士・庶民)からの視点にもよる海辺浜辺の多様な利用に注目していく。

II. 名所図会にみる海辺の利用

名所図会にみられる海辺利用の事項を抽出した(表1)。これらは、漁業や漁撈、遊漁、漁業見物、海産物情報、潮干狩り、潮浴、石や貝拾い、海辺の景勝地、伝承や祭などである。

「漁業」の風景は『紀伊国名所図会』に多く、『尾張名所図会』『撰津名所図会』などにもみられる。また漁業の見物の風景、遊びながらの釣りなどもある。海辺の利用は潮干狩りや石拾い、潮湯などがある。海辺の美しい

表1 各名所図会の海辺関係の記事

名所図会	海辺関係利用の主題	特徴
江戸	高輪海辺／品川汐干／今井 津頭	海辺利用
江戸	佃島白魚網／大森浅草海苔／杉田村海鼠製／行徳 汐浜	漁業・漁撈・製造・遊漁
江戸	品川牛頭天王／浅草	由緒・祭
江戸	河崎汐濱／雀ヶ浦／行徳衛（鳥見物）	景勝地
尾張	塩湯治（小倉村海音寺）	海辺利用
尾張	魚市問屋／海藻おご／星崎名産前濱塩／名産干海老／亀崎 海鼠 腸章魚壺／篠島 須佐の入江（鱈魚）／内海浦鯛網／	漁業・漁撈・製造・遊漁
尾張		由緒・祭
尾張	鷲峯山汐干眺望の図／築地 楼上の遊興／横須賀	景勝地・見物
伊勢	阿漕浦の図	由緒・祭
伊勢	大湊	遊漁
摂津	長映の潮干 3月3日／住吉の潮浴び 6月14日	海辺利用
摂津	尻無川の鯊釣り／大和田鯉掴み／兵庫の生簀	漁業・漁撈・製造・遊漁
摂津	西宮前御前澳の桜鯛蛭子三郎殿初釣り／	由緒・祭祀
淡路	五色濱 石拾	海辺利用
淡路	福良浦小鯛網	漁
淡路	鹿が瀬	由緒
淡路	吹上浦／志築浦	景勝
紀伊	吹上浜 汐干／松江濱 蛤貝拾い	海辺利用
紀伊	湊河口／雑賀崎浦 磯釣岩／妹背 牡蠣 海苔／和歌浦網引方／ 加田和布／塩津湊 敷網 鯨鱈／有田川 鵜飼／鮎瀧／三尾浦 アワビ潜水／和田浦 ハマチ網	漁
紀伊	雑賀川／矢櫃浦／黒島仏石／白埼／海驢島／由良湊	景勝 由緒

風景や漁の様子を眺める描写もある。さらに海に関する伝承や祭事の描写もある。それに基づきながら、以下では名所図会別に概要を説明する。

『江戸名所図会』にも海辺の描写がみられる。漁業関係は「中川の鱈（キス）釣り」「佃島の白魚網」や海鼠製造、行徳の製塩などがある。「今井の津頭（わたしば）」は、「柴屋軒（さいおくけん）宗長が永正六年の紀行に『東土産』に、「隅田川の河舟にて葛西の府のうちを半日ばかり葭・蘆をしのぎ、今井といふ津（わたり）より下りて、浄土門浄興寺に立ち寄りて」とあれば、はやくよりこの津のりしことしられたり。」と記している。

『摂津名所図会』には、住吉浦の「長央の浦の潮干」と「住吉の潮干（3月3日）」「住吉の潮浴（6月14日）」、さらに「尻無川の鯊釣り」、「雑喉場魚市」「永代濱ほし魚市」「京橋爪川魚市」「西宮前御前澳の桜鯛」、「大和田鯉掴み」、「兵庫生簀」などの海と水辺の利用の描写がある。『伊勢参宮名所図会』の海辺の描写は、伊勢神宮付近の大湊、阿漕浦の図がある。

『紀伊国名所図会』は紀伊が沿岸部を多く占めていることもあり、海辺の利用の描写が多い。漁業の操業の様子、漁業見物、海辺の景勝地とそれを望む展望所、海の磯での釣りなどがある。とりわけ、和歌の浦に多くの頁

を費やしてその歴史や由緒を明らかにし、また数多くの詳細な図を掲載している¹⁹⁾。

『尾張名所図会』の海辺の風景の特徴としては漁業操業の具体的な風景が少ないものの、景勝地の描写が多く、地元海産物の解説もみられる。海産物の挿絵はほとんどないが、潮湯治の描写がある。『金比羅参詣名所図会』『讃岐国名勝図会』にも海辺の利用の描写がみられる。『淡路国名所図会』は福良浦小鯛網があるものの漁の描写は多いとは言えない。本稿では五色濱の石拾に注目した。『長崎名勝図絵』は海辺の描写が多いが、海辺の利用に関する内容は少ない。本稿では漁と遊びの描写として「白魚梁」に注目した。

Ⅲ. 海辺の描写の特徴

海の眺望、漁業見物

海の景勝地と、そこを人々が眺めている描写がある。『紀伊国名所図会』には、絵馬楼という展望所から若浦（和歌浦）を眺める子供も含めた何人もの男女の姿が描かれている。（図1 左上 絵馬楼若浦『紀伊国名所図会』）加田（加太）の「新田旅店」から海を眺める人の下には、磯の和布を採取し、海苔簀に入れて四角にしたノリを天日で干している様子が描かれている（図1 右上 加田和布『紀伊国名所図会』）。『江戸名所図会』の行徳衛（ちどり）では行徳の浜辺で漁師たちの作業場の横の建物の中から横になった数名

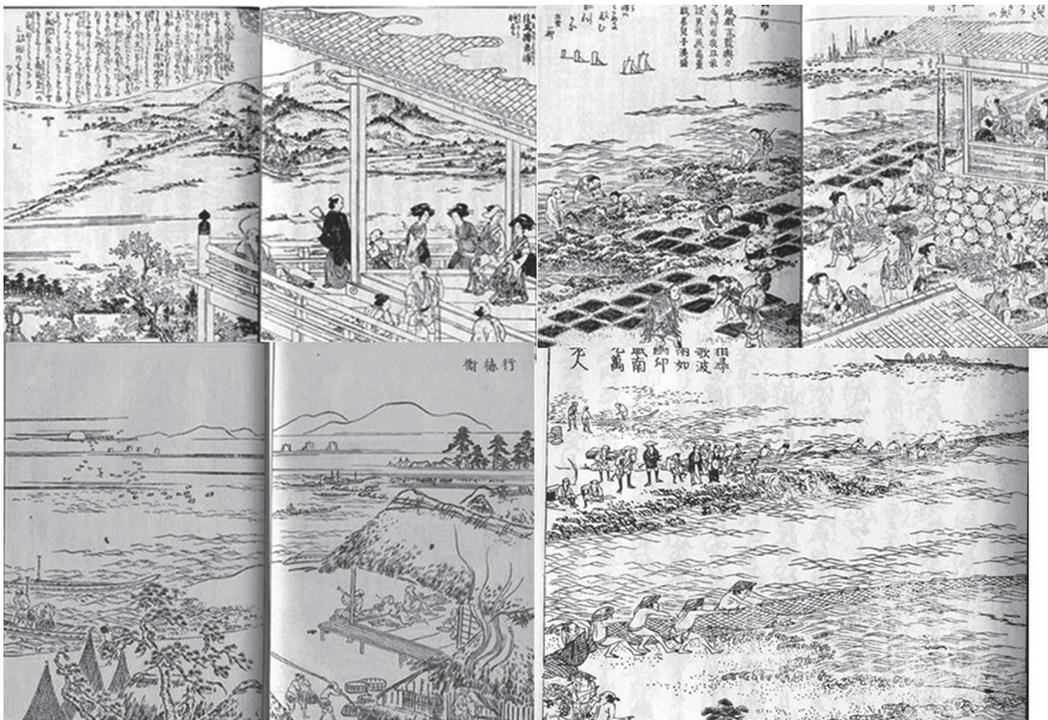


図1 海岸眺望の図

- 左上 『紀伊國名所圖會 初・二編』（版本地誌大系9）臨川書店、1996、716-717頁（二編巻之5、文化9年本の複製）。
 右上 『紀伊國名所圖會 初・二編』（版本地誌大系9）臨川書店、1996、502-503頁（初編巻之3下、文化8年本の複製）。
 左下 「行徳衛」『日本図會全集 江戸名所図會 第四冊』日本随筆大成刊行会、1928、1998-1999頁。
 右下 『紀伊國名所圖會 初・二編』（版本地誌大系9）臨川書店、1996、370-371頁（初編巻之2、文化8年本の複製）。

の男たちがちどりの群れを眺めている。タバコを吸うものもいる(図1 左下)。

『紀伊国名所図会』の和歌浦では漁師たちが地引網や船で敷網をおこなっている様子も描かれている。手前が地引網である。その後の磯場に笠をかぶったたくさんの一般人(旅の者らしき姿の者、子供もいる)が集まり、左の2人はタバコを吸いながら座っている。また裸になって海に入っている人もいる。これは海や漁の様子を見物しているものと推測される。3人乗りの船三艘は人物が裸のようであるので、敷網の漁船と推測される(図1 右下 和歌浦網引方『紀伊国名所図会』)。『紀伊国名所図会』の塩津湊のボラカマスの敷網の図では、上部の街並みと海岸沿いの街道を歩く人々が下部の海上における船で敷網を囲んでボラやカマスを捕っている様子を眺めているのではないかと想起される。

釣り場と釣舟

『紀伊国名所図会』の雑賀崎浦の磯釣り岩と呼ばれる小島付近の描写(図2)からは釣り竿から釣り糸をたれている様子や、中磯などの細かい磯の地名がわかる。「ハントコ本場」なる釣り場では3人が釣り糸を垂れている。また同じ図の別の個所では舟からの釣りが描かれている。人物は2~3人、後方には



図2 『紀伊国名所図会』の雑賀崎浦の磯釣り岩
『紀伊国名所圖會 初・二編』(版本地誌大系9) 臨川書店、
1996、268-269頁(初編巻之2、文化8年本の複製)。

棹を操る人がいる。船の中には小さな帆がみられる。この描写が生業の漁師なのか遊漁者なのか判断が難しい。

釣り遊びと酒宴

『摂津名所図会』の「沙魚釣り」には、およそ16艘の船の客がハゼ釣りに興じ、女性とともに酒宴を楽しむ様子が描かれ、「秋興沙魚釣 沙魚つりや水村山廓酒旗の風 嵐雪」とある(図3 沙魚釣『摂津名所図会』)。『伊勢参宮名所図会』の「大湊」では飲み食いしながら釣りを楽しんでいる様子が描かれている。

『紀伊国名所図会』の「鮎瀧」は、海ではなく川の事例であるが、3・4月に河を遡上する鮎をたも網ですくう様子を大勢の見物客の男女が眺めている。そのなかには酒を酌み交わし、酒宴を始めている人々もみられる。



図3 沙魚釣 『摂津名所図会』

『摂津名所図會 第一巻』(版本地誌大系10) 臨川書店、
1996、370-371頁。

四手網とシロウオ・シラウオ漁

『長崎名勝図会』の「浦上村白魚(しろいを)梁」(図4左上)は、四手網を上げ下げする人の横に隣接する建物の中で料理が出され飲み食いしている様子を描いている。「やなの川は浦上山里村にある。流れ清く、余り深くない。川中の処々に網を置いて、白魚を取る。網は蚊帳の布のようなものを用い、四手に竹を組みわたり、緒縄をつけて杭にかけ、魚の集まるような場所に卸しておいて、時々これを引揚げては杓ですくい取るのである。網を置く所の側には藁小屋を作って仕事場にする。」とある²⁰⁾。この白魚は、正月の初めから出て、二月彼岸の頃が最盛期となり、その時期には行楽客が来て、川の近くの家などで菴などを敷いてにぎわっていたという。浦

上川の下流部は、流れが緩やかで白魚漁が盛んに行われていたとされ、付近は周囲を竹で渡し堰を作り魚の集まる場所が作られ網を沈めて仕掛けが作ってあり。この白魚漁は早春のころ最盛期を迎え、連日行楽客で賑わっていたといい、これは昭和期まで続き、「白魚とりの浦上川」の古写真もあるという²¹⁾。

四手網は、他の名所図会でも散見される。『江戸名所図会』の佃島の白魚漁(シラウオ)では約14艘の船が網を上げ下げし、松明を焚いている。網を四方から持ち上げる2本の棒が交差した部分をとめる十字形の部品(ツツ)が描かれていることが神野善治によって指摘されている²²⁾。長崎よりもかなり大きな網で、経済的な漁業であったと推測されるが、漁師がたばこを吸い、欠伸をする様子も

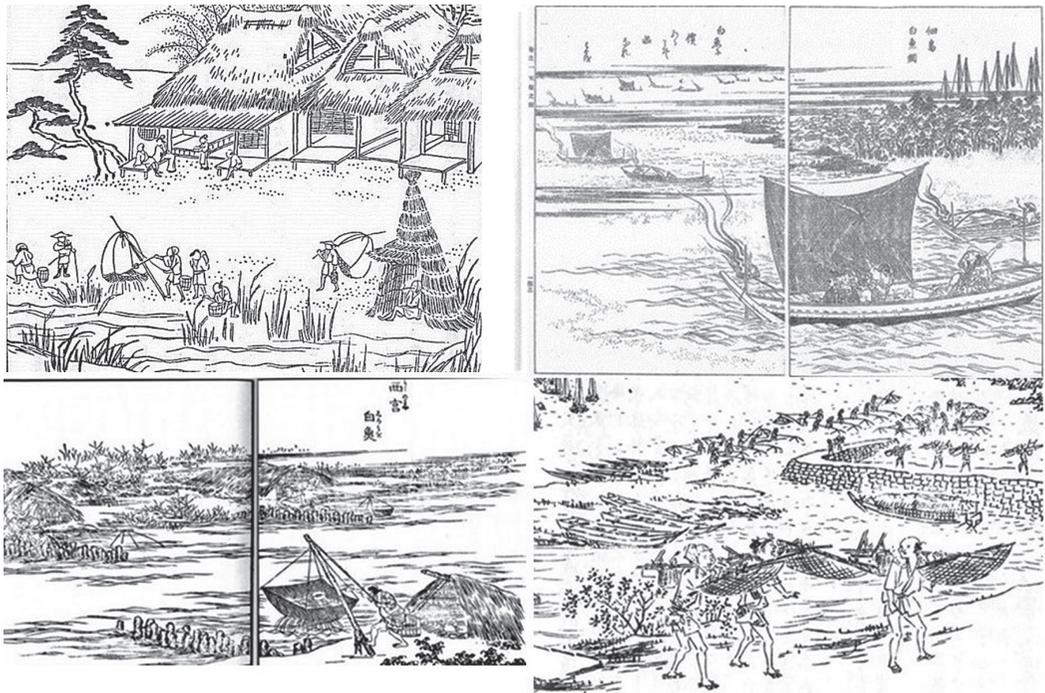


図4 四手網

左上 「浦上村白魚(しろいを)梁」『長崎名勝図会』長崎史談会、1931、316頁。

右上 「佃島白魚網」『日本図会全集 江戸名所図会第一冊』吉川弘文館、1928、142-143頁。

左下 『日本山海名産図会』名著刊行会、2005、204-205頁(寛政11年刊行の影印の複製本)。

右下 『紀伊國名所圖會 後編』(版本地誌大系9)臨川書店、1996、158-159頁(後編、嘉永4年本の複製)。

描かれている(図4右上)。『日本山海名産図会』には、西宮の白魚(しろうお)網として四手網が出てくる。ここでは四手網と小屋が描かれ、左手で四手網を引き上げながら、右手を使ってタモ網でシロウオをすくっている。小屋の中には火鉢と急須、湯飲みのようなものが置かれている。対岸の漁師は網を沈めて小屋の中で待っている。のんびり待ちながら漁をおこなっていたことがうかがわれる(図4左下)。

『紀伊国名所図会』には「方の川口にて白魚を取る図」(紀州加茂川)に四手網がある。ここでは肩に網をのせて歩く様子、漁場の浅瀬につながる堤の上を人が網を持って向かう様子、浅瀬で25名くらいの人が網を上げ下

げしている様子が描かれている。「産物白魚(しろうお)方村の加茂川の海口にて冬より春うけて専漁獵す多く泉抄へ鬻ぐといふ」とある。冬から春にかけての季節の産業で、風物詩でもあったことがうかがわれる(図4右下)。四手網は、現在においても日本から東アジア、東南アジア、南インドの Cochina などに存在している。日本では減少し続け、山口県萩市のシロウオ漁や佐賀県有明海の四手網、青森県の蟹田、能登半島などにみられる。

潮干狩り

図5は潮干狩りの様子を描いた図である。『江戸名所図会』の「品川 汐干 蛤」でも

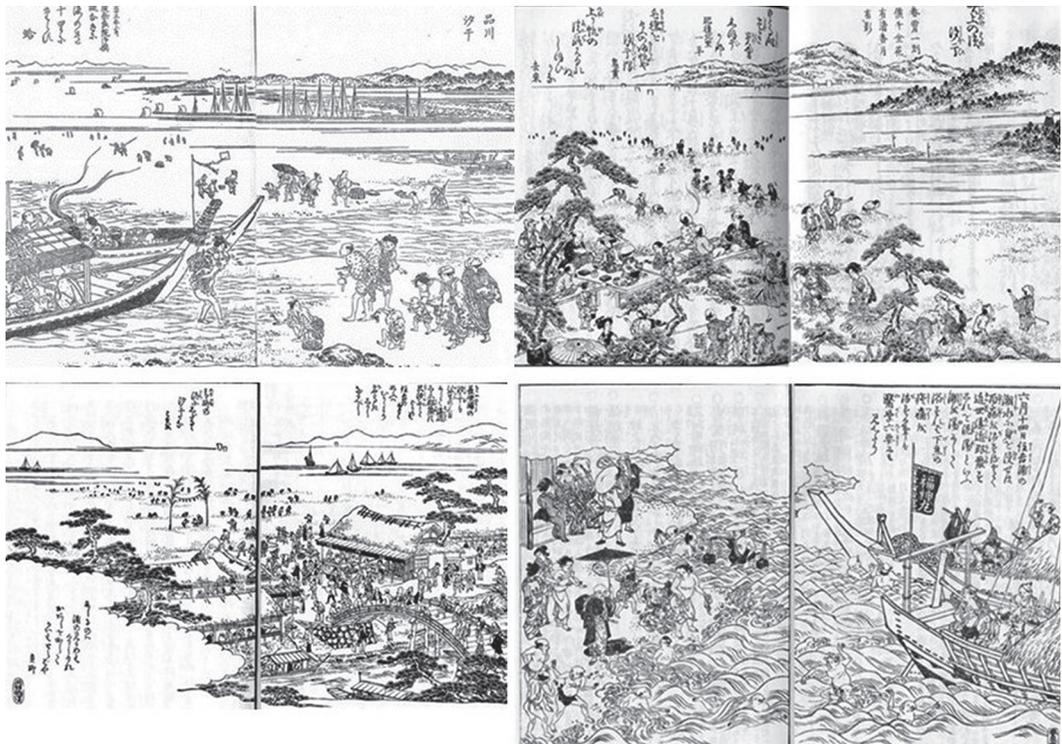


図5 潮干狩り関係の描写

左上 「品川汐干」『日本図会全集 江戸名所図会第一冊』吉川弘文館、1928、286-287頁。

右上 『紀伊國名所圖會 初・二編』(版本地誌大系9)臨川書店、1996、192-193頁(初編巻之1、文化8年本の複製)。

左下 『摂津名所図会』(版本地誌大系10)臨川書店、1996、66-67頁。

右下 『摂津名所図会』(版本地誌大系10)臨川書店、1996、82-83頁。

品川の汐干で蛤採取と船での宴会の様子が(図5左上)、『紀伊国名所図会』(初編 巻一下)にも吹上浜の潮干狩りの描写がある(図5右上)、『撰津名所図会』住吉浦の潮干の図(図5左下)には浜の入り口に二本の棹のような描写があり、そこを通過して浜にはいつ潮干狩りをおこなっていたことがうかがわれ、「長央浦の汐干弥生の三日にして、遠近ここに群聚す。ただ汐干とばかりも住吉の事と思ふは、むかしより名高きしるしなるべし青柳の泥にしだるる汐干かな はせを(芭蕉)にじるのは浦の見るめもくるしけれおあしを出してかひもとらばや 貞柳」という記述がある。本文には「三月三日住吉汐干」として「此日は住吉浦の汐干」[浜辺に出てあずまからげの老若小兒も出でても沖の方遠く出て真砂の蛤をにじりあるいは鎌にて搔備中鍬にて捜すもあり海浜には茶店軒をつらね蛤焚きて酒売店あり杵の拍子どりおろして餅つくいえあり(略)楼船を浮めて道頓堀より十三間川を船に綱引せて此浜に至り春色のうらうらなり……]とある。住吉には「潮湯」の風景(図5右下)も描かれている²³⁾。「六月十四日、住吉浦の潮水に身を浸せば、百病を治するとて、近世遠近群聚す。これを泥湯といふ。潮を湯にして浴すれば、下焦の疼痛を治する事は『医学六要』にも見えたり」とある。住吉大社の神輿について、橋爪によると「6月の満月の夜に浜辺で潮水で洗っていた。神輿を洗ったその潮水を汲み上げて沸かしそれにつかるとありとあらゆる病気が治るといわれていた。」という²⁴⁾。日常的におこなわれていた尾張の潮湯治と比べると、霊性が強いものと推察される²⁵⁾。

『淡路国名所図会』²⁶⁾には「五色濱」での石拾いが描かれている。図には「鳥飼の浦なる赤崖の濱者一円に五色の小石にして其美観なること言に絶たり故に世俗五色濱と号すさる程に遠近の旅客手毎に拾ひて家土産となす実に當州一奇の名産といふべし 怪石録に

所謂弾子渦石も此小石の類なるべし」とある。石拾いの場としての浜辺の空間が、様々な性格を帯びていたことがうかがわれる。海辺の貝拾いなどの描写はほかに多くみられ、『万葉集』の故地として描いている事例もある。

IV. まとめ

本稿では、名所図会にみる海辺の利用の一部を取り上げてきた。ここでは浮かび上がってきた特徴を示し、まとめとしたい。

生業としての漁業の様子を見物する描写が散見された。つまり、漁業自体を見どころ、「名所」として紹介しているのである。このことは漁の様子が人々にとって興味をひく対象であったことを示している。現在でも広島県福山市鞆の浦のタイ縛り網や富山県魚津市のホタルイカ漁などの見学が知られている。捕鯨の様子も『勇魚取絵詞』などで描写され、広く興味関心の対象になったように、一般の漁業もその対象になっているのである。

また、四手網でとれたシロウオ、船上で自らが釣ったハゼ、川の事例であるが鮎漁でとれたアユを酒の肴として楽しむ様子も描かれていた。漁業見物や遊びの釣りとセットでの魚の食習慣が一般庶民の娯楽の対象になっていることがうかがわれる。こうした行動が派生する理由として、地域の特産品を楽しむ文化の存在もうかがわれる。海を眺望する場所(景勝地)がいくつかみられ、そこでもまた酒宴が催されていた。

同じ四手網を用いた漁法でも、経済的な漁業、自給自足や余暇の形でおこなわれていた漁などが存在することも名所図会の描写からうかがわれる。漁業の問題について、各地の名所図会から検討する余地は残されている。

海辺・浜辺の利用は、潮干狩り、石や蛤拾い、潮湯、祭事などが見られた。ここからは、生業としての面のみならず非日常のハレの行事の場としての海辺利用の面も見いだせる。ハレの場としての海の捉え方は、潮の満

ち干の「聖性」や浜という境界的な場の特性と関係するのではないかと推測される。名所図会からは、海辺が、聖なる場から漁、遊び、観光の場へと変化していることが見通せるのではないだろうか。

名所図会の海辺描写にはその場所の故事来歴も豊富に取り上げられているが、今後検討していきたい。なお名所図会の海辺の風景の選定にあたっては、中国の八景や故事などとの関係も想定される。他地域の名所図会の検討、中国の絵画史料、アジア各地の海辺水辺の風景との比較を進める余地がある。

(東京学芸大学)

〔注〕

- 1) 妻は漁業の6次産業化などの事例からを示しながら、漁村再生のカギとして、「漁業」にとどまらないレジャーや食育などを含む多様な要素を「海業」としてとらえている。①妻小波『海業の時代—漁村活性化に向けた地域の挑戦』農山漁村文化協会、2013。②全国漁業協同組合連合会編『海のルールとマナー教本』、2012、<https://www.zengyoren.or.jp/cmsupload/press/65/20120518/uminoru-rutomana-dokuhon.pdf> (閲覧日2018年7月10日)
- 2) 「遊び」に関する視点はホイジンガ『ホモルーデンス』、ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』らによって示され、アランコルバンは『浜辺の誕生』で「怖れと嫌悪の淵源、怪物の棲みか、『聖書』解釈の場たる混沌の世界から、「浜辺」を奪還した「近代人」というような人と海の多様な関係の変質について社会史的な視点から示した。①ホイジンガ、高橋英夫訳『ホモルーデンス』中央公論社、1973。②ロジェ・カイヨワ、清水幾太郎訳『遊びと人間』岩波書店、1970。③アランコルバン著、福井和美訳『浜辺の誕生』藤原書店、1992。
- 3) 『世界大百科事典第2版』平凡社、1998。
- 4) ①日本水産学会水産増殖懇話会編『遊漁問題を問う』恒星学厚生閣、2005。②鄧君龍「遊漁としての釣り文化：近代における釣りの発展」(松崎憲三編『民俗的世界の位相：変容・生成・再編』慶友社、2018)。
- 5) 永田一脩『江戸時代からの釣り』新日本出版社、1987。
- 6) 長辻象平『江戸釣魚大全』平凡社、1996。
- 7) 太田尚宏「解題 黒田五柳「釣客伝」」(宮田 満ほか『日本農書全集第59巻漁業2』農山漁村文化協会、1997)。
- 8) 浦安市郷土博物館編『浦安市郷土博物館調査報告第6集 ハマン記憶を明日へ2 聞き書き報告書2 (女性・子ども・水産関係以外の職業者編)』、2009。
- 9) 佐藤七郎編『庄内の釣・垂釣筈』本間美術館、1976。
- 10) 武藤鐵城『秋田郡邑魚譚』アチックミュージアム、1940。
- 11) 前掲6)。
- 12) 小口千明「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」人文地理37-3、1985、215-229頁。
- 13) 江戸東京博物館編『大浮世絵展 公式図録』江戸東京博物館、2014などの浮世絵展でも紹介されている。2017年には太田記念美術館で「大江戸クルージング展」が開催され、海辺の利用をめぐる多くの浮世絵が紹介された。
- 14) 西田正憲『瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ』中央公論新社、1999。
- 15) ①松浦 勉「中学校教育における漁村宿泊体験学習の展開」漁業経済研究49-3、2005、25-45頁。②鞆の浦歴史民俗資料館編『鞆の浦の自然と歴史』福山市鞆の浦歴史民俗資料館、2011。③山口くるみ「千葉県鯛の浦におけるタイの食物禁忌」口承文藝研究41、2018、91-103頁。
- 16) 松浦 勉「定置漁村の特性と観光定置の成立条件の関係について」水産総合研究センター研究報告5、2002、55-67頁。
- 17) ①岡田智秀ほか「江戸名所図会と明治東京名所図会における親水行為・空間」『日本建築学会学術講演梗概集』A-2、1997。②岡田智秀ほか「わが国における「海景観賞の型」とその空間構成に関する研究：江戸名所図会にみる視覚構造を通じて」土木学会論文

集 D 19, 2002, 321-330頁。

- 18) ①前掲12)。②橋爪紳也「名所大浜と潮湯について」『フォーラム堺 8集』堺都市政策研究所, 2002。③長谷川奨悟「近世上方における名所と風景—秋里籬島編『都名所図会』・『摂津名所図会』を中心に—」人文地理64-1, 2012, 19-40頁。④長谷川奨吾「近世日本における「名所図会」資料の編纂動向」『2016年度日本地理学会秋季学術大会要旨集』, 2016。
- 19) 和歌山県教育委員会『和歌の浦学術調査報告書』, 2010。
- 20) 『長崎名勝図絵』卷之三 西邊之部 183 梁白魚 (文献叢書版, 1974の171-176頁)。
- 21) ながさき浪漫会編『ながさき浪漫: 写真でしのぶ明治・大正・昭和: アルバム長崎百年』長崎文献社, 1999, 102頁。
- 22) 神野善治「四ツ手網考」物質文化41, 1983, 51-67頁。
- 23) 小口は尾張の潮湯治 (大野) について, 『尾張名所図会』を取りあげている。前掲12)。
- 24) 前掲18) ②。
- 25) 前掲12)
- 26) 『淡路国名所図会』(版本地誌大系5巻) 臨川書店, 1995, 532-533頁。